コラム
No. 011

平成 25 年 4 月作成

第 3 の財務諸表
キャッシュフロー計算書の話

キャッシュフロー計算書という財務諸表をご存知でしょうか？財務諸表というと一般的には「貸借対照表」と「損益計算書」をイメージする人が多いと思います。

貸借対照表とは期末におけるその会社の財産・債務の状態を、損益計算書とは一会計期間の利益（損失）の獲得状況をそれぞれ表すもので、財務諸表の中で最も重要なものです。そのほかに「株主資本変動計算書」があり、獲得した利益や配当の状況を記載した表です。

そして 2000 年に新たに導入されたのが「(連結) キャッシュフロー計算書」で、上場企業にのみ作成が義務付けられているため、見たことがない方も多いかもしれません。

キャッシュフロー計算書は「現金などのキャッシュの収支（増減）」をあらわす表です。キャッシュフロー計算書が導入された背景はコラム No. 008～010 でご紹介した黒字倒産が増加したからです。かつての日本では損益計算が重視され資金管理はそれほど重視されませんでした。それは必要な資金は金融機関から簡単に融資を受けられたからです。しかし、現在では金融機関も簡単には融資に応じてくれないため、単に損益計算書上で利益を確保しているのみでは足りず、**支払能力に不足を生じさせない事が重要**になってきたのです。

キャッシュフロー計算書

Ⅰ　営業活動によるキャッシュフロー
Ⅱ　投資活動によるキャッシュフロー
Ⅲ　財務活動によるキャッシュフロー
Ⅳ　現金及び現金同等物に係る換算額
Ⅴ　現金及び現金同等物の減少額
Ⅵ　現金及び現金同等物期首残高
Ⅶ　現金及び現金同等物期末残高

キャッシュフロー計算書は右表のような項目に分かれています。「Ⅰ**営業活動によるキャッシュフロー**」の区分は、営業収入、仕入・製造等に関する支出、人件費その他の営業関連支出等、**企業の主たる事業活動による資金の増減**を表します。「Ⅱ**投資活動によるキャッシュフロー**」の区分は**投資有価証券・固定資産等の購入や売却に関連する資金の増減**を表します。「Ⅲ**財務活動によるキャッシュフロー**」の区分は**長期借入金による収入や返済による支出等に関する資金の増減**を表します。

「Ⅰ営業活動によるキャッシュフロー」の区分がマイナスであるということは、本業の収支状況が思わしくないということなので、注意が必要です。

「Ⅱ投資活動によるキャッシュフロー」の区分がマイナスということは、積極的な設備投資を行っていることが多く、翌期以降の収支や利益状況が改善される見込みがある一方、それらの改善が見られないと設備投資等が負担になっていると考えられます。逆にこの区分がプラスである場合、不動産や機械設備の売却によるリストラが行われている可能性が高く、更に営業活動によるキャッシュフローがマイナスである場合には本業の資金不足をこれらの資金により補填していることが考えられます。

「Ⅲ財務活動によるキャッシュフロー」の区分がプラスで、投資活動によるキャッシュフローがマイナスであれば、設備投資をするための資金を借入金等により調達していると考えられます。また、営業活動によるキャッシュフローがマイナスで、この区分がプラスであれば本業における資金不足を借入金等で補填しているとも考えられます。

このように、**キャッシュフロー計算書では損益計算書ではわからない資金の流れを把握**できます。これらの情報は、特に個別の取引金額が大きい業種や売上利益率が低い業種において、融資の際重要な判断基準とされることがありますので、注意が必要です。